

対人認知における学歴と顔の相互作用

川西 千弘

我々は、初対面の他者についてごく限られた情報からでも、その人の印象を形成することができる。これは、我々が自分なりに過去の経験から外見や社会的カテゴリーについて既に一定のイメージや信念を抽出しており、それを稼働させて他者の人物像を推察しうるからである。Lippmann (1922) は、このような働きをするイメージや信念のことをステレオタイプと呼んだ。近年、このステレオタイプの構造と機能が情報处理的観点から明かされつつある。これによると、ステレオタイプとは各カテゴリーにそれと関連する性格特性や行動が付随した階層状知識体系で (Stephan, 1989)、印象形成では認知的枠組みとして機能し、情報の選択的注意や、記憶・解釈・推論の方向づけを行うとされている。

そこでこれらの知見を受けて、近頃印象形成のプロセスに関わる2つのモデル～ Brewer (1988) の二重処理モデルと Fiske & Neuberg (1990) の連続体モデル～が提唱された。前者は認知者の自我関与が処理方略を決定すると主張するのに対し、後者では対人関係が続く限り処理方略の妥当性が繰り返し検討されると主張する点で相違が見られが、この2つのモデルには概ね共通した仮定がある。つまり印象形成には、他者に対してステレオタイプを当てはめるトップダウン的情報処理過程と、その人の個人情報情報を逐次検索するボトムアップ的情報処理過程が存在し、通常的印象形成では前者が後者に優先してほぼ自動的に発生するというものである。これら両モデルは印象形成のメカニズムを説明しうるものとして非常に有用であるが、理論やモデルの精緻化に傾倒するあま

り単一のステレオタイプのみを取り上げ、それと個人情報との関連で論が展開されている。しかし、Kunda & Thagard (1996) が指摘するように、現実には大抵の人が常に多次元的なくつものカテゴリーに属しており、認知者は1つのステレオタイプに注目するのではなく、その人が持つ多くのステレオタイプを同時並列的に処理して印象を形成している。つまり、より現実に密着した研究をするには、複数のステレオタイプを同時に取り上げ、その対人認知過程への影響を明らかにすることが肝要である。そこで、本研究では一般的な面接場面を考慮し、その際最も入手しやすい学歴と顔の2つを取り上げ、その相互作用について検討することにした。

さて、学歴が対人認知に及ぼす影響については、佐々木 (1997) 及び池上・斎藤 (1999) が詳細な検討を行っている。佐々木は、ある人物が塾で授業する場面を大学生に見せ印象評定させた。その際彼の出身を高難度有名大学と低難度一般大学の2種類で操作した。その結果、一般大学よりも有名大学出身の方が、「博識」「責任感が強い」など社会的望ましさで高い評価を受ける反面、「感じの良い」「親切な」など好感度では低い評価を受けることが示された。更に、池上らは日本の大学制度の序列化を鑑み、国立及び私立大学生の各イメージを検討した。その結果、私立大学生は「華美」、国立大学生は「有能」「温厚」「強靱」と見なされることが示された。いずれの研究でも学歴が個人の知的能力を知る手がかりになるだけでなく、その人の能力や人柄全般をも推測する手がかりになっていた。これは言い換れば、我々が既に学歴に関して一定のステレオタイプを持ち、それを当てはめて他者を見ていることになる。

一方、顔が対人認知に及ぼす影響については、Secord (1958) が顔から性格を推測する過程として以下の5つを挙げている。(a) 時間的拡張：一時的な表出特徴をあたかも永続的な性格特性であると考える傾向 (例、偶々微笑んでいるのを見て温厚な人だと思い込む) (b) 重要な他者からの一般化：重要な他者と類似した相貌の人に同様の性格特性を仮定する傾向 (例、頑なに父をもつ人が、父親に似た顔の人を頑固だと考え) (c) 範疇化：あるカテゴリーに入ると共通する性格特性を帰属させる傾向 (例、「美しい人はよい人だ」という美

人ステレオタイプ (Dion, Bersheid & Walster, 1972) (d) 隠喩的一般化：顔から受ける感じをそのまま性格特性に一般化する傾向 (例、「幼児的顔の人は性格も子供っぽい」というベビーフェイスステレオタイプ (Berry & Landy, 1997) (e) 機能的推論：顔の各部分の形態的特徴や機能によって性格特性を推測する傾向 (例、「口の大きい人は積極的」という相貌特徴ステレオタイプ (林, 1978a)。なるほど顔は個人情報であり、個々の人によって異なるものである。しかし、上述したように我々は社会的カテゴリーと同様に、顔にも既にステレオタイプの認知を持っており、これに沿って推論することで顔だけからでもかなり明確な印象を形成することができるのである (Lewicki, 1986a)。

以上のことから、学歴及び顔について各々ステレオタイプの認知が存在するのは多くの研究で一致した見解である。しかし、ここで問題とすべき点は学歴と顔が併存する際の相互作用である。Kundaらは一般的に複数のステレオタイプが存在する場合、それらが協同的であればステレオタイプ効果は促進され、逆にそれらが競合的であればその効果は抑制されると仮定しており、これを実証することが肝要であろう。また、彼らは社会的カテゴリー (例、人種、職業等) のステレオタイプのみ注目して論を進めているが、現実の対人関係では顔が入手しやすくインパクトのある手がかりであることを思うと、学歴と顔という顕著にモダリティーが異なる2つ対人情報においてもそのような現象が生起するののかについて具体的に検証するべきである。更に、より多角的視点にたてば、個人情報に対するそれらの影響過程についても論を展開していくことが必須と考えられる。そこで、以上のような問題意識から本研究では、まず (A) 刺激人物の学歴と顔を提示し、それらが協同 (実験 I) または競合 (実験 II) する状況を設定し、この2つがいかに結合して印象を形成するのかを確認する。次に (B) 同刺激人物の日常の行動を提示し、各状況で学歴及び顔が後続個人情報処理に対していかなる相互作用を及ぼすのかについて更なる検討を加える。なお、本研究では学歴が知的側面において鮮明な効果を及ぼす可能性を考慮し、それをより直接的に検出するため刺激作成や評定項目選定など実験操作全般に渡って、「知性」を基準とした。

さて、従来「知性」は知能や成績などによって表現される「学力的知的さ」に代表されてきたが、近年この「知性」の新しい側面が注目されている。社会的有能性 (Sternberg, 1985)、EQ (Goleman, 1995) 及び社会的かしこさ (木下, 1999) などと称される「社会的知的さ」である。特に木下はこれらを「現実の生活に根ざした社会的存在としての人間の知性」と位置づけ、以下の5つの構造次元を明らかにしている (1) 全体をバランスよく把握する大局的発想、(2) 個別的状況で自己資源を最大限に発揮する状況適合性、(3) 他者との関係で対象を理解し、共感性などにも通じる相対化能力、(4) 自我の豊かさや強靱性に関連する内的世界の広がり、(5) 感情が豊かであつそれを統制できる感情制御。そこで、本研究では「学力的知的さ」及びこの「社会的知的さ」の両知性を主軸に、学歴と顔が対人認知過程でいかに影響し合つて、総合的な人物像を形成するのかを検討することにした。

実 験 I

〔目 的〕

学歴と顔を知性次元で齊合的に組み合わせ、これら2つの協同効果について検討する。

〔方 法〕

参加者 女子大学生107名。ただし、実験が行われた両日共に出席した者のみを参加者とした。

実験計画 2要因2水準計画とした。第1要因は事前情報に含まれる顔の有無であり、学歴のみの場合と学歴に齊合的な顔が付加される場合の2水準からなる。また、第2要因は学歴の程度であり、「一流国立大学出身」と「三流私立大学出身」の2水準からなる。この実験では学歴と顔を齊合的とするため、顔有条件では（一流国立大学出身＝一国・知的な顔＝I顔）及び（三流私立大学出身＝三私・知的でない顔＝U顔）という組み合わせで事前情報を構成した。なお、2要因とも被験者間要因で、参加者と刺激人物は異性とした。

刺激材料 1. 顔刺激：川西 (1995a, 1998) と同様の40枚の男性顔写真を

用いた。これらは年齢が類似し、強い感情的表情がないなどを注意し雑誌から選択した。写真は正面向き肩から上部を撮影し3×4cmに統一し、カラープリントした。なお、本研究では顔に対する各参加者の認知を尊重するため、各参加者の主観的判断によりI顔・U顔を選択させる必要から多数の刺激が有用で、やむなくビデオなどではなく顔写真を用いた。

2. 個人情報刺激：参加者とは別の男女大学生24名に男性の知的な人格及び知的でない人格を推測する行動を自由記述させ、文の長さを15~22文字に統一して100文を抽出した。予備調査(1)で、これを参加者とは別の女子大学生37名に7件法(かなり知的を7)で男性の行動としての知的さを評定させた。さらに、予備調査(2)で、参加者及び予備調査(1)以外の女子大学生17名に上記100文の各行動について〔学力的に知的な行動〕か〔社会的に知的な行動〕かを2者択一させた。その際、評定者には前もって各知性の説明文を熟読させ、その差について理解させた。その結果、参加者の75%以上の人々が「学力的」または「社会的」と判断した行動が弁別性が高いとし、これを刺激に用いた。予備調査(1)と(2)の結果を基に知的文(=Int文)12文(学力的及び社会的Int文、各6文)(予備調査(1)評定平均点5.75、SD=0.93)と知的でない文(=Uni文)12文(学力的及び社会的Uni文、各6文)(評定平均点2.21、SD=0.98)、及びこの次元での中立文6文(評定平均点4.00、SD=1.02)を選択した。なお、Int文とUni文の評定平均点の差は有意であった($t(36)=15.73$, $p<.01$)。そこで、内容が矛盾しないように学力的Int文、社会的Int文、学力的Uni文、社会的Uni文及び中立文を各2文ずつ組み合わせ10文からなる行動文を3種類作成し参加者間でカウンターバランスし、後続個人情報として配布した。

評定課題 評定用紙には以下の2課題を記載した。

- 1、印象評定課題：木下(1999)、林(1978a)、佐々木(1997)、池上ら(1999)を参考に、知性に関する形容詞30対を抽出した。予備調査(3)で、参加者及び予備調査(1)(2)以外の女子大学生40名に各形容詞対について〔学力的知的さを表現する形容詞〕か〔社会的知的さを表現する形容詞〕か〔どち

らでもない]かを3者択一させた。なお、評定に先立って各知性に関する説明文(予備調査(2)と同様)を熟読させた。その結果、80%以上の参加者が「学力的」または「社会的」と判断した形容詞対が弁別性が高いとし、各5対ずつを評定に用いた。さらに、好意度と対人認知3次元の形容詞対を選択し、全部で20対の印象評定課題とした。なお、評定は7件法のSD形式を用いたが、評定用紙上左右どちらに肯定的な形容詞がくるかは形容詞対ごとにランダムにし、提示順序を入替えた評定用紙を4種類作成し、参加者間でカウンターバランスした。

2、行動可能性課題：予備調査(1)(2)で行動文刺激としたもの以外で「知的さの極端さ」及び「学力的-社会的知的さの弁別性」が高い行動12文を選択し、各行動について「刺激人物が日常生活で、その行動をする可能性(以下、行動可能性と記す)」を7件法で評定させた。

なお、評定用紙と刺激は別の冊子になっており、評定中は刺激が除かれた状態にあった。

手続き 実験は、集団法で行った。調査第1日目には顔の選択を行った。具体的には、顔刺激とした40枚の全写真を参加者に配布し、「各自、知的なあるいは知的でないと思われる人物の顔写真を各3枚ずつ順位をつけて選択してください。ただし、その際顔の美醜や善悪及び好嫌に拠らないで、あくまで「知的さ」を考慮してください」と教示した。また、各自選択した人物について「知的な-知的でない」を加えた印象評定課題を実施した。なお、顔刺激は各参加者がI顔またはU顔で1位に選択したものをを用いたが、その際「知的な-知的でない」の評定でI顔は6(知的な)以上、U顔は2(知的でない)以下の評定をしていることを確認した。

調査2日目には、「ある人物について、どのような印象を持つかを調べる調査です」と教示した上で、以下の手順により実験を行った。

1. 事前情報の提示(1分間) 山田君の学歴を提示した。その際、顔有群では上記により各参加者が選択した顔写真を山田君の顔として同時提示した。
2. 第1回評定(3分間) 前述した評定用紙で、印象評定と行動可能性につ

いて評定させた。

3. 後続個人情報の提示 (2.5分間) 「山田君の日常行動です。これを参考に、山田君がどんな人物かを総合的に考えて下さい」と教示した上で、後続個人情報を学歴とは別の冊子で提示した。各ページには山田君の1行動文を載せ、顔有群では事前情報と同じ写真を同時提示した。各ページの提示は10秒間とし、Int文、Uni文及び中立文の提示順序は参加者間でカウンターバランスした。
4. 第2回評定 (3分間) 第1回評定と同様の方法で総合的な山田君の印象を再度評定させた。なお、再度の評定であることをできるだけ意識させないように、評定項目の順序は入れ替えた。

〔結果〕

因子の抽出 各課題毎に第2回評定値を基に因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を行った。その際より安定した因子を抽出し、結果を比較するため実験Ⅱのみに参加した112名の評定値も加えて分析対象とした。

1. 印象評定値 各形容詞について7件法のSD形式としたが、分析に際して数値が高くなるほど肯定的になるよう数値化した (例、とても好き=7)。分析の結果、固有値1以上、因子パターンの単純性・解釈可能性から以下の4因子解が妥当と判断し、各因子に負荷量の高い (.52) 形容詞対を選択した。次元、選択した形容詞名、及びその固有値は以下の通りである。

学力的知的さ (2.45) : 頭の良い—頭の悪い・学力の高い—学力の低い・博識な—無知な

社会的知的さ (3.56) : 親切な—意地悪な・臨機応変な—臨機応変でない・社交的な—社交的でない・分別のある—無分別な

好意度 (2.06) : 好き—嫌い・魅力のある—魅力のない・つきあいたい—つきあいたくない

活動性 (1.84) : 積極的な—消極的な・意欲的な—無気力な・意志の強い—意志の弱い

2. 行動可能性 各項目について数値が高くなる程知的行動をする可能性が高い

ことを表すように数値化した。分析の結果、固有値1以上で2因子が検出され、各因子に負荷量の高い(.53)項目を選択した。次元、選択した項目例及び固有値は以下の通りである。

学力的知的な行動可能性（以下、学力的行動）(3.77) “キャリアアップのために資格検定の勉強をする” “大学生の頃は休講の空き時間にも本を読んだ” など5項目。

社会的知的な行動可能性（以下、社会的行動）(2.32) “人と協調して仕事が進められる” “何かにつけてバランス感覚がよい” など4項目。

第1回評定結果 学歴と顔の協同効果を検討するために各次元ごとに第1回評定値を従属変数として、顔の有無×学歴の2要因分散分析を行った。

1.印象評定値 (a) 学力的知的さ：顔の有無、学歴の主効果及び交互作用が有意（傾向）になった（順に $F(1,103)=11.70$ 、 $F(1,103)=424.66$ 、共に $p<.01$ 、 $F(1,103)=2.91$ 、 $p<.1$ ）。下位検定の結果、顔無・顔有両条件で学歴の効果が（順に $F(1,48)=154.96$ 、 $F(1,55)=277.59$ 、共に $p<.01$ 、共に一国>三私）、また三私条件で顔の有無効果がみられた（ $F(1,51)=8.94$ 、 $p<.01$ ）。つまり、U顔の付加により学力的知的さが悪化するが、この次元ではそもそも顔の有無に関わりなく学歴の効果が顕著であった。

(b) 社会的知的さ：顔の有無、学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,103)=6.91$ 、 $F(1,103)=23.10$ 、 $F(1,103)=10.53$ 、共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件のみで学歴の効果が（ $F(1,55)=34.33$ 、 $p<.01$ ）、また、三私条件で顔の有無効果がみられた（ $F(1,51)=20.89$ 、 $p<.01$ ）。つまり、学歴だけでは社会的知的さに差は見られないが、三流私立大学出身にU顔が付加されると印象が悪化し、その為両者の差が鮮明になることが示された。

(c) 好意度：顔の有無と学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,102)=11.90$ 、 $F(1,102)=32.97$ 、 $F(1,102)=11.43$ 、共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が（ $F(1,54)=37.02$ 、 $p<.01$ ）、また三私条件で顔の有無効果がみられ（ $F(1,51)=21.88$ 、 $p<.01$ ）、好意度においても社会的知的さと同様の現象が確認された。

Table 1. Means and standard deviations of impression and behavior possibility (Exp. I)

Target information	First rating				Second rating			
	only Academic career (I · *)	Academic career (U · *)	Academic career and Face (I · I)	Academic career and Face (U · U)	only Academic career (I · *)	Academic career (U · *)	Academic career and Face (I · I)	Academic career and Face (U · U)
Impression rating								
Achievement intelligence	6.55 (0.63)	3.24 (1.23)	6.24 (0.72)	2.32 (0.99)	4.70 (1.12)	4.00 (0.81)	5.03 (0.92)	3.57 (1.12)
Social intelligence	4.73 (1.09)	4.49 (0.95)	4.83 (0.95)	3.38 (0.91)	3.94 (1.23)	4.20 (0.71)	4.43 (1.07)	3.63 (1.01)
Likability	4.01 (0.86)	3.59 (0.99)	3.99 (1.08)	2.23 (1.06)	3.74 (1.23)	3.76 (1.30)	3.92 (1.32)	2.50 (1.18)
Activity	5.21 (1.22)	3.76 (1.30)	4.83 (1.16)	2.97 (1.16)	4.99 (1.00)	4.94 (0.97)	5.07 (1.01)	4.35 (1.24)
Behavior possibility								
Achievement intelligence behavior	6.36 (0.70)	3.54 (1.06)	5.85 (0.80)	3.00 (1.10)	4.74 (1.13)	4.47 (0.87)	4.96 (0.97)	3.85 (1.26)
Social intelligence behavior	4.78 (1.38)	4.06 (0.96)	5.42 (0.94)	3.17 (0.88)	3.97 (1.02)	4.13 (0.94)	4.76 (0.91)	3.68 (1.00)

Note (I · *) = First-class national university, (U · *) = Third-class private university
 (I · I) = First-class national university + intelligent face, (U · U) = Third-class private university + unintelligent face

(d) 活動性：顔の有無及び学歴の主効果が有意（順に、 $F(1,103)=6.08$ 、 $p<.05$ 、顔無>顔有、 $F(1,103)=50.26$ 、 $p<.01$ 、一国>三私）になった。

2. 行動可能性 (a) 学力的行動：顔の有無及び学歴の主効果が有意（順に $F(1,101)=8.07$ 、顔無>顔有、 $F(1,101)=236.25$ 、一国>三私、共に $p<.01$ ）になった。

(b) 社会的行動：学歴の主効果が及び交互作用が有意（順に $F(1,102)=52.93$ 、 $F(1,102)=13.23$ 、共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔無・顔有両条件で学歴の効果が（順に $F(1,48)=4.18$ 、 $p<.05$ ； $(1,54)=84.07$ 、 $p<.01$ 、共に一国>三私）、また三私条件で顔の有無効果がみられた（ $F(1,51)=12.01$ 、 $p<.01$ ）。つまり、U顔の付加により知的な社会的行動をする可能性はより低いと評価されたが、顔の有無に関係なく学歴の効果が大きかった。

第2回評定結果 学歴と顔が後続個人情報処理に及ぼす影響を検討するため、各次元ごとに第2回評定値を従属変数として、顔の有無×学歴の2要因分散分析を行った。

1. 印象評定値 (a) 学力的知的さ：学歴の主効果が有意（ $F(1,102)=30.01$ 、 $p<.01$ 、一国>三私）になった。このことから、この次元では顔の有無にかかわらず個人情報を得ても学歴の影響が鮮明であることが示された。

(b) 社会的知的さ：交互作用が有意（ $F(1,102)=6.67$ 、 $p<.05$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴効果が（ $F(1,55)=8.40$ 、 $p<.01$ 一国>三私）、また三私条件で顔の有無効果がみられた（ $F(1,50)=4.89$ 、 $p<.05$ 、顔無>顔有）。つまり、学歴に齊合的な顔が付加されると個人情報を得ても両者の差が払拭せず、特にU顔による印象の悪化は個人情報学習後でも顕著であることが示された。

(c) 好意度：顔の有無と学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,103)=4.48$ 、 $p<.05$ 、 $F(1,103)=9.38$ 、 $F(1,103)=8.72$ 、共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が（ $F(1,55)=18.42$ 、 $p<.01$ ）、また三私条件で顔の有無効果がみられた（ $F(1,51)=13.39$ 、 $p<.01$ ）。つまり、好意度でも社会的知的さと同様の現象が確認された。

(d) 活動性：交互作用が有意傾向を示した ($F(1,102)=2.45$, $p \leq .1$)。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,55)=5.44$, $p < .05$)、また、三私条件で顔の有無効果の傾向がみられた ($F(1,51)=3.31$, $p < .1$)。つまり、個人情報が入手されると、学歴だけでは効果が払拭されるのに対し顔が付加されるとその効果が温存され、特にU顔が付加されると印象悪化が改善されにくかった。

2. 行動可能性 (a) 学力的行動：学歴の主効果及び交互作用が有意（傾向）（順に $F(1,100)=11.04$, $p < .01$, $F(1,100)=3.71$, $p < .1$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,53)=12.83$, $p < .01$, 一国 > 三私)、また三私条件で顔の有無効果に傾向が見られた ($F(1,49)=3.76$, $p < .1$)。つまり、活動性と同様学歴だけではその効果が払拭されるが、斉合的な顔が付加されると効果が温存され、特にU顔による効果が顕著だった。

(b) 社会的行動：学歴の主効果が及び交互作用が有意（順に $F(1,98)=6.35$, $p < .05$, $F(1,98)=9.85$, $p < .01$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,51)=16.43$, $p < .01$)、また一国条件で顔の有無効果が見られた ($F(1,50)=8.36$, $p < .01$)。つまり、ここでも前述同様の現象が確認されが、この次元ではむしろI顔の効果が著しかった。

[考察]

本実験は、学歴と顔が斉合的に併存する場合の協同効果と両者の後続個人情報処理への影響について検討した。ここでは、得られた知見を整理し考察を試みる。

まず、協同効果については第1回評定値から以下のことが明らかになった。つまり、印象評定の学力的知的さと活動性及び行動可能性の両次元で学歴の効果が顕著にみられ、顔の有無に関わりなく一流国立大学出身は肯定的に三流私立大学出身は否定的に評価されることが明らかになった。しかし、社会的知的さと好意度では学歴だけでは効果が無く、それに斉合的な顔が付加されて初めて著しい差が生じることが示された。このことは学歴ステレオタイプの効果が

次元に関して限定的であることを示唆していた。また、学力的知的さ、社会的知的さ、好意度と社会的行動で知的でない顔が付加すると評価が悪化するという顔のネガティビティ・バイアスが明らかになった。しかし、いずれにせよ学歴と顔が齊合的に併存すると印象評定及び行動可能性の全次元に顕著な差がみられる事から、両者が協同的な場面では2つのステレオタイプ効果が促進されることが示唆された。

次に、顔と学歴が後続個人情報処理に及ぼす影響については、第2回評定値から以下の様相が明らかになった。つまり、学力的知的さでは顔の有無に関わらず後続個人情報を得ても、なお学歴の差は鮮明であった。このことは、学歴の効果が次元限定的である事を再確認させると同時に、この次元における影響が特に顕著であることを示していた。しかし、活動性と行動可能性の両次元では個人情報が加わると学歴のみでは差が消失したが、社会的知的さ、好意度、活動性及び行動可能性の両次元の顔有条件では、個人情報を加味しても評価差が歴然と維持されていた。このことは、両者が協同的な場合は印象の定着化が起り、後続の個人情報処理が緩慢になることを示していた。Stangor & Ruble (1989) によると、このような現象の起因として認知者が情報処理を行う姿勢（積極的か消極的か）が考えられる。つまり、学歴だけでは学力的知的さ以外の人物像は未熟であるため、認知者は適正な印象を形成しようと積極的に個人情報に働きかけ、それを精緻かつ入念に処理して初期の人物像を修正・調節した。このため学歴の効果は払拭されたと考えられる。しかし、学歴に齊合的な顔が付加されるとその相乗作用により、その印象が成熟し強化される。このため認知者は“認知的儉約家”の立場から経済的処理を嗜好し、後続個人情報に対して消極的な働きかけしかしない。その結果、既存のステレオタイプに適合させるトップダウン的情報処理が生起し、初期の人物像が維持・定着したものと考えられた。つまり、学歴に齊合的な顔が付加されると後続情報処理に対してもそのステレオタイプ効果が促進されることが明らかになった。

なお、ここでも社会的知的さ、好意度、活動性及び学力的行動で知的でない顔の付加により、いくら個人の行動を加味してもその悪印象が改善されにくく

なるという印象の定着化に対する顔のネガティビティ・バイアスが確認された。

実 験 II

〔目 的〕

学歴と顔を知性次元で不斉合的に組み合わせ、これら2つの競合効果について検討する。

〔方 法〕

参加者 実験 I 及び予備調査とは別の女子大学生 112 名。その他条件は実験 I と同様。

実験計画 2 要因 2 水準計画とした。要因、水準共に実験 I と同様であった。ただし、この実験では第 1 要因の顔有条件では、事前情報として提示する学歴と顔を不斉合とするため「一国・U 顔」及び「三私・I 顔」とした。その他の実験方法は実験 I と同様であった。

〔結 果〕

因子の抽出 実験 I と同様の次元を用いた。

第 1 回評定結果 学歴と顔の競合効果を検討するために各次元ごとに第 1 回評定値を従属変数として、顔の有無×学歴の 2 要因分散分析を行った。

1. 印象評定値 (a) 学力的知的さ：学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,108)=417.07$ 、 $F(1,108)=39.80$ 共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔無・顔有両条件で学歴の効果が（順に $F(1,49)=1020.11$ 、 $F(1,59)=69.88$ 、共に $p<.01$ 、共に一国>三私）、また一国・三私両条件で顔の有無効果が見られた（順に $F(1,56)=13.11$ 、 $p<.01$ 、顔無>顔有、 $F(1,52)=28.26$ 、 $p<.01$ 、顔無<顔有）。つまり、顔が対峙すると学力的知的さに対する印象は緩和されるが、それは学歴効果を凌駕するものではなかった。

(b) 社会的知的さ：特に顕著な結果なかった。

(c) 好意度：顔の有無と学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,108)=15.81$ 、 $F(1,108)=11.26$ 、 $F(1,108)=25.73$ 、共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が（ $F(1,59)=27.30$ 、 $p<.01$ 、一国<三私）、ま

Table 2. Means and standard deviations of impression and behavior possibility (Exp. II)

Target information	First rating				Second rating			
	only Academic career (I · *) (U · *)	Academic career and Face (I · U) (U · I)	only Academic career (I · *) (U · *)	Academic career and Face (I · U) (U · I)	only Academic career (I · *) (U · *)	Academic career and Face (I · U) (U · I)	only Academic career (I · *) (U · *)	Academic career and Face (I · U) (U · I)
Impression rating								
Achievement intelligence	6.69 (0.39)	2.92 (0.45)	5.97 (0.96)	3.98 (0.90)	4.74 (0.82)	3.63 (0.86)	4.68 (1.06)	3.77 (1.11)
Social intelligence	4.62 (0.55)	4.34 (0.54)	4.42 (0.93)	4.71 (0.85)	4.07 (0.75)	4.00 (0.73)	3.58 (0.98)	4.43 (0.88)
Likability	4.10 (0.68)	3.79 (0.67)	2.44 (1.14)	3.99 (1.18)	4.14 (0.93)	3.95 (1.06)	2.20 (1.06)	3.79 (1.25)
Activity	5.17 (0.73)	3.85 (0.75)	4.32 (1.19)	4.30 (0.96)	4.99 (0.91)	4.61 (0.74)	4.42 (0.92)	5.02 (1.17)
Behavior possibility								
Achievement intelligence behavior	5.95 (0.45)	3.53 (0.83)	5.79 (1.06)	4.38 (0.79)	4.35 (0.99)	4.06 (1.00)	4.89 (1.05)	3.91 (1.17)
Social intelligence behavior	4.71 (0.76)	4.23 (0.71)	4.63 (1.04)	4.73 (0.71)	3.98 (0.84)	3.82 (0.79)	4.02 (0.92)	4.49 (0.94)

Note (I · *) = First-class national university, (U · *) = Third-class private university
(I · U) = First-class national university + unintelligent face, (U · I) = Third-class private university + intelligent face

た一国条件で顔の有無効果がみられた ($F(1,56)=42.98$, $p<.01$, 顔無 $>$ 顔有)。つまり、U顔が対峙されると好意度が極端に悪化し、学歴効果を反転させることが示された。

(d) 活動性：学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,108)=13.82$, $F(1,108)=12.85$, 共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔無条件で学歴の効果が ($F(1,49)=39.95$, $p<.01$, 一国 $>$ 三私)。また、一国・三私両条件で顔の有無効果がみられた（順に $F(1,56)=9.95$, $p<.01$ 顔無 $>$ 顔有, $F(1,52)=3.52$, $p<.1$, 顔無 $<$ 顔有)。つまり、顔が対峙すると印象の中性値化が起こり、学歴の効果を払拭した。

2. 行動可能性 (a) 学力的行動：顔の有無と学歴の主効果及び交互作用が有意（順に $F(1,106)=4.81$, $p<.05$, $F(1,106)=148.73$, $F(1,106)=10.33$, 共に $p<.01$ ）になった。下位検定の結果、顔無・顔有両条件で学歴の効果が（順に $F(1,49)=169.40$, $p<.01$, $F(1,57)=33.51$, $p<.01$ いずれも 一国 $>$ 三私)、また、三私条件で顔の有無効果が見られた ($F(1,52)=14.80$, $p<.01$, 顔無 $<$ 顔有)。つまり、I顔が対峙すると学力的に知的な行動をしないという評価は緩和されるが、それは学歴の効果を凌駕するものではなかった。

(b) 社会的行動：交互作用が有意傾向を示した ($F(1,107)=3.43$, $p<.1$)。下位検定の結果、顔無条件で学歴の効果が ($F(1,49)=5.45$, $p<.05$, 一国 $>$ 三私)、また三私条件で顔の有無の効果がみられた ($F(1,52)=6.67$, $p<.05$, 顔無 $<$ 顔有)。つまり、I顔の対峙により中性値化が起こり、ここでは学歴の効果を払拭した。

第2回評定の結果 学歴と顔が後続個人情報に及ぼす影響を検討するために、各次元ごとに第2回評定値を従属変数として、顔の有無 \times 学歴の2要因分散分析を行った。

1. 印象評定値 (a) 学力的知的さ：学歴の主効果のみが有意 ($F(1,108)=29.61$, $p<.01$, 一国 $>$ 三私) になった。つまり、顔の有無にかかわらず個人情報を得ても学歴効果が顕著だった。

(b) 社会的知的さ：学歴の主効果と交互作用が有意（順に $F(1,107)=5.87$,

$p < .05$, $F(1,107) = 8.06$, $p < .01$) になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,58) = 12.50$, $p < .01$, 一国 < 三私)、また一国・三私両条件で顔の有無効果がみられた (順に $F(1,55) = 4.30$, $p < .05$, 顔無 > 顔有, $F(1,52) = 3.80$, $p \leq .05$, 顔無 < 顔有)。第1回評定で顔の対峙により中性値化していたが、個人情報解釈で顔の方向性に印象を変化させた為に、学歴の効果を反転させた。

(c) 好意度：顔の有無と学歴の主効果及び交互作用が有意 (順に $F(1,108) = 25.81$, $F(1,108) = 11.52$, $F(1,108) = 18.80$, 共に $p < .01$) になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴効果が ($F(1,59) = 28.93$, $p < .01$, 一国 < 三私)、また一国条件で顔の有無の効果がみられた ($F(1,56) = 53.52$, $p < .01$, 顔無 > 顔有)。つまり、ここではU顔の対峙により印象が悪化していたが、個人情報を学習してもなおこの悪印象は改善されず、学歴の効果を反転させたままであった。

(d) 活動性：交互作用が有意 ($F(1,108) = 7.29$, $p < .01$) になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴効果が ($F(1,59) = 5.10$, $p < .05$, 一国 < 三私)、また一国条件で顔の有無効果がみられた ($F(1,56) = 5.54$, $p < .05$, 顔無 > 顔有)。つまり、この次元でも社会的知的さと同様の現象が確認された。

2. 行動可能性 (a) 学力的行動：学歴の主効果と交互作用が有意 (傾向) (順に $F(1,108) = 9.92$, $p < .01$, $F(1,108) = 2.91$, $p < .1$) になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,59) = 11.80$, $p < .01$, 一国 > 三私)、また一国条件で顔の有無効果がみられた ($F(1,56) = 4.00$, $p < .05$, 顔無 < 顔有)。これは、顔有条件では個人情報を解釈する際に学歴の効果を反映させたためであった。
- (b) 社会的行動：顔の有無の主効果と交互作用が有意 (傾向) (順に $F(1,108) = 4.56$, $p < .05$, $F(1,108) = 3.53$, $p < .1$) になった。下位検定の結果、顔有条件で学歴の効果が ($F(1,59) = 3.87$, $p \leq .05$, 一国 < 三私) また三私条件で顔の有無効果がみられた ($F(1,52) = 7.92$, $p < .01$, 顔無 < 顔有)。つまり、社会的知的さと同様の現象が確認された。

〔考 察〕

本実験は、学歴と顔が不斉合的に併存する場合の競合効果と両者の後続個人情報処理への影響について検討した。ここでは、得られた知見を整理し考察を試みる。

まず、競合効果については第1回評定値から、以下のことが明らかになった。つまり、学力的知的さ及び学力的行動においては、顔の対峙にもかかわらず一流国立大学出身の方が三流私立大学出身よりも肯定的に認知され、これらの次元では学歴の影響が鮮明で顔の効果を凌駕することが示された。しかし、活動性と社会的行動では顔が対峙すると学歴効果を払拭して差が消失し、更に好意度では顔の効果が大きく学歴効果を反転させた。山本（1987）や笹山（1989）では、集団（大学の所属サークル）と外見を対峙させたところ、概ね外見に沿った印象が形成されており、上記次元ではこれと対応した結果になった。つまり、これらの次元では顔は学歴と同等或いはそれ以上の重みで印象形成に参画していた。以上のことから、学歴と顔が競合的場面では2つのステレオタイプ効果が一様に抑制されるのではなく、次元弁別的であることが確認された。

次に、顔と学歴が後続個人情報処理に及ぼす影響について第2回評定値から以下の様相が明らかになった。つまり、個人情報を得ても学力的知的さでは顔の対峙の有無に関わらず学歴効果が顕著であった。また、学力的行動では、顔無条件では個人情報を学習すると学歴の評価差が消失したが、顔が対峙する条件では学歴と同方向の評価差が維持されていた。つまり、これらの次元では、個人情報の解釈に際して学歴が認知的枠組みとして有効に機能しており、その効果は学歴が顔を凌駕していた。しかし、活動性や社会的行動の顔無条件では個人情報が加味されると学歴の効果が払拭し、更に社会的知的さ、好意度、活動性及び社会的行動の顔が対峙する顔有条件では学歴の効果が反転した。特に、社会的知的さや好意度では知的でない顔の効果が顕著で、後続個人情報の解釈にあたって知的でない顔に誘引されて印象が悪化することが示された。つまり、これらの次元では学歴より顔が認知的枠組みとして優位に機能しており、その効果は顔が学歴を凌駕していた。なお、ここで注目すべき点は顔無条件と異な

り顔有条件では評価値が単純に中性値（4.00）に近づいているわけではないということである。つまり、顔有条件の参加者は、ステレオタイプを棄却して個人情報を検索するボトムアップ的情報処理に切り替えたのではなく、自らの認知的不協和を脱する為に、認知的枠組みとしてやはりステレオタイプを活用していたと考えられる。

Fiskeら（1990）は、他者が持つ様々なステレオタイプの中から認知者が優位なものを選び、それをを用いて連続体モデルの過程が稼働するとしている。しかし、これでは非常に顕著な複数のステレオタイプが併存する場合の解釈が困難である。本研究では顔と学歴が競合する場合、互いが単純に抑制しあってその効果を消失させるのではなく、また認知者は決して常に1つのステレオタイプを偏向するものでもないことが示された。つまり、認知者は刺激人物のどの側面を評価するかによって、それにふさわしいステレオタイプを選択し、それを合理的に処理方略に用いているのである。

総合考察

本研究は、対人認知における学歴と顔の相互作用について検討した。その結果、両者が斉合的な場合は両者のステレオタイプ効果は促進されることが明らかになったが、不斉合的な場合は一様にそれらが抑制されるのではなく、刺激人物のどの次元を判断するかによって、学歴または顔のいずれかが選択され、その印象形成に参画していくことが明らかになった。

さて、ここでは、実験Ⅰと実験Ⅱで共通して示唆された点について言及する。まず、第1点は課題に関わらず学力的知的さの評価については概ね学歴が、一方社会的知的さ、好意度及び活動性では概ね顔が優位に機能し、それぞれのステレオタイプ効果が次元弁別的であったことである。学歴効果が上記次元に限定的かつ直接的影響を与えた背景には以下のことが考えられる。そもそも学歴はその人がどのような教育をどの程度受けたかを示す指標であり（池上ら、1999）、これを本実験で用いた20歳代を想定した刺激人物の学力的知的さの評価に用いることは、ある種事実との照合とも考えられ妥当性を含んでいる。し

かし、その他の次元では学歴効果は存在しても（佐々木, 1997）希薄であるため（池上ら 1999）、顔や個人情報によって容易に解消された。一方、顔は各次元に拡散的影響を及ぼしていた。これは、顔に拠る印象が認知者の長年の経験により蓄積され、かなり結晶化した暗黙裡の人格観であるだけに、瞬時に多くの推論を喚起し（Lewicki, 1986a）、対人感情を生起させる（Dion, Bersheid & Walster, 1972）ため、妥当性の有無はともかく、多くの次元で包括的な対人認知が可能となったものと考えられる。

第2点は、両実験において概ね知的でない顔の方が知的な顔より影響が大きいというネガティブ・バイアスが見られたことである。対人認知におけるネガティブ・バイアスの根拠には、頻度－重み仮説（Fiske, 1980, ネガティブな情報がより精緻な処理を受ける）と期待－対比仮説（Skowronski & Carlston, 1987, 認知者の期待との対比からネガティブな情報が本来の情報価より極端に認知される）がある。いずれにせよ、他者のネガティブな情報に注目することは、将来予期される不愉快な相互交渉を避け（Hamilton & Zanna, 1972）、有害な社会的刺激から個体を防御する（池上, 1996）ため、人が生きていく上で合理的と考えられる。上記の顔効果の非対称性も、このようなメカニズムによる可能性がある。ただし、本研究のバイアスは「知的さ」という次元で顔を選択させたために起こったものかもしれない。なぜなら、知性が感じられない人との相互交渉は直接的に不利益を被る可能性が高く、認知者がそのことに敏感に反応したとも考えられるからである。

いずれにせよ、我々は常に多種多様な情報を統合して他者の印象を形成し、適応的に振る舞うことが要求されている。本研究は、初対面で最も入手されやすい学歴と顔の対人認知における相互作用の一端を明らかにした点で意義があると思われた。

引用文献

- Berry, D.S. & Landry, J.C. 1997 Facial maturity and daily social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 570-580.
- Brewer, M.B. 1988 A dual process model of impression formation . In T.K.Srull & R.S.Wyer (Eds), *Advances in social cognition* (p1-36). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Dion, K.K. Bersheid, E., & Walster, E. 1972 What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 285-290.
- Fiske, S.T. 1980 Attention and weight in person perception : impact of negative and extreme behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 889-906.
- Fiske, S.T., & Neuberg, S.L. 1990 A continuum model of impression formation from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In: Zanna, M.P (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, 23, Academic Press, San Diego, CA, 1-74.
- Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ*. Bantam Books.
- Hamilton, D.L., & Zanna, L.J. 1972 Differential weighting of favorable and unfavorable attributes in impressions of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 204-212.
- 林 文俊 1978a 相貌と性格の仮定された関連性 (3) - 漫画の登場人物を刺激材料として -. 名古屋大学 教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 41-55.
- 池上知子 1996 対人認知の心的機構 - ポスト認知モデルへの提言 - 風間書房
- 池上知子・斎藤照代 1999 学歴ステレオタイプの構造とその影響に関する一考察 愛知教育大学研究報告 48, 81-88.
- 川西千弘 1995b 対人認知における顔の機能 - 処理人物の複数化と顔の好ましさととの関連で -. *心理学研究*, 66, 261-268.
- 川西千弘 1998 正確さへの動機づけが対人認知における顔の機能に及ぼす効果. *心理学研究*, 68, 465-470.

- 木下富雄 1999 IQから社会的「かしこさ」へ 心理学ワールド 13-15 日本心理学会
- Kunda, Z & Thagard, P. 1996 Forming impression from stereotypes, traits and behaviors : A parallel-constraint-satisfaction theory. *psychological review* 103 284-308.
- Lewicki, P. 1986a Processing information about covariations that cannot be articulated. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 12, 135-146.
- Lippmann, W. 1922 Public opinion. Macmillan. (掛川トミ子訳 「世論」岩波文庫 1987)
- 佐々木美加 1997 学歴が人物評価に与える影響 産業・組織心理学研究 10. 145-154.
- 笹山郁生 1989 所属集団のステレオタイプが印象形成に及ぼす影響. 日本心理学会第53回大会発表論文集, 253.
- Secord, P.F. 1958 Facial features and inference processes in interpersonal perception. In R. Tagiuri & L.Petrullo (Eds.) *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford: Stanford University Press.
- Skowronski, J.J., & Carlston, D.E. 1987 Social judgment and social memory : The role of cue diagnosticity in negativity, positivity, and extremity biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 689-699.
- Stangor, C., & Ruble, D.N. 1989 Strength of expectancies and memory for social information: What we remember depends on how much we know. *Journal of Experimental Social Psychology*, 25, 18-35.
- Stephan, W.G. 1989 A cognitive approach to stereotyping. In D. Bartal, C. F. Graumann, A. W. Kruglanski. & W. Strobe (Eds), *Stereotyping and prejudice : Changing conceptions*. Springer-Verlag. pp3-34.
- Sternberg, R.J. 1985 *Beyond IQ*. Cambridge University Press.
- 山本真理子 1987 矛盾する対人情報が統合されるとき 外見的特徴—外見的特徴

と所属集団に関するくい違う手がかりをもとにつくられる印象一. 東京都立
大学 人文学報, 189. 55-80.